

新たな指針（ポリシー）を求めて

－ 情報学とプログラミングの新しいカタチ:情報メディア教育 －

情報学教育フォーラム議長 松原伸一

第4回情報学教育フォーラムは特別な意味がありました。それは、この度のフォーラムにて一定のまとめを行い、新たな門出としての役割がありました。

振り返れば、第1回及び第2回は、早稲田大学（東京）にて開催させていただき、また第3回は、大阪学院大学（大阪）にて開催することができました。いずれも、初等中等教育に一貫した情報学教育、すなわち、情報学教育の K-12 カリキュラムをテーマとしてまいりました。その中でも、特に喫緊で重要な事項として、学校におけるプログラミング教育は第1回より継続して取り上げてきました。

ところで、「学校におけるプログラミング教育」というフレーズは、私にとっては決して新しいものではありませんでした。その理由は、今から 27 年前に同名の著書を上梓していたからです⁽¹⁾。つまり、研究はそれより前からの研究活動を要しますから、結局のところ 30 年以上もの長きにわたり、私に押し掛かってきた「長年の課題」ということです。そこで、この度注目すべきは、小学校におけるプログラミング教育の必修化だと思います。当フォーラムでも、初等教育段階にも焦点を当てて検討してまいりましたが、そろそろ、一定のまとめを行う時期と判断いたしました。とはいえ、この時点で総括するのはなかなか困難です。敢えてこの場にて、まとめるとすれば、賛成意見と反対意見とが常に混在し、論点を整理して議論を行わないと、局所的な考察となり判断を間違えるかも知れないといった危惧だけでなく、プログラミングを知っている（できる）レベルではなく、本当にプログラミングにて生活している最先端の方の意見や、またこれとは正反対に、プログラミングとは全く無関係と思われる立場にて、最先端の仕事をしている方のご意見を頂戴することが、いかに大切かということを知りました。これは、第4回情報学教育フォーラムにて提案された「緊急会議」によるものが大きいと思います。

以上の理由から、第4回情報学教育フォーラムのテーマは、「カリキュラムイノベーション」といたしましたが、あれから6か月が経過し、今改めて回顧すれば、現状にふさわしく今後に向けての重要な「節目」であったことが理解いただけると思います。詳細につきましては、関係の著述を参照願えれば幸いです。その要点を示せば、次世代を視野に入れた innovative な情報学教育は、新たな視点で、「情報学・次世代教育」と表現し、

Project1: 感性に響く情報メディア教育

Project2: 理性に届く情報メディア教育

Project3: 知性に繋ぐ情報メディア教育

の各プロジェクトにて拡大・深化することとなりました。

なお、この度は、「感性に響く情報メディア教育の新しい展開」となります。皆様のご理解とご協力を引き続き賜れば幸いです。

(1) 松原伸一：学校におけるプログラミング教育－支援システムとその利用－，
（株）オーム社（1990）。